新春特集

わがまち「竜王」を輝かせる人々

平成24年度の「交竜の郷あえんぼ賞」は、皆さんに推薦いただきました中から選考の結果、7者の個人・グループが受賞され、昨年11月3日、「竜王町文化きらめきフェア」で受賞者の紹介式が行われました。今月号では、受賞された皆さんの活動をご紹介します。

竜王町は、私たちの周りで、広く地域を支える奉仕活動や社会に貢献する活動、人知れず地道で心温まる活動、他の模範となるような善行活動などを行っている人・グループに深く感謝し、町民皆さんの心豊かな住みよいまちづくりへの参加が広がることを目指します。

※受賞者のご紹介は順不同です。

大谷 和男 さん

おおたに・かずお　（新村）

町内の幼稚園児や保護者にイチゴ狩りやサツマイモ掘り体験のため、自らの農園を開放されるとともに育て方や収穫の仕方のお話しをされるなどの支援を継続。

「子どもたちが大勢来てくれると、にぎやかで楽しいです」とにこやかに話される大谷さん。幼稚園の先生から子どもたちにイチゴ狩りをさせてほしいと依頼があったことがきっかけで、ご自身の農園を開放されるようになり、秋には大谷さんの方から「サツマイモ掘りに来いひんかぁ？」と声を掛けられたことから、以後10年以上にわたり、毎年園児や保護者に収穫の喜びを味わう体験を提供されています。「3歳児なんかは、5月のイチゴのときは、入園したてで、そわそわしている感じやけど、イモ掘りのときには落ち着いてきていて毎年感心します」と収穫体験を通して子どもたちの成長を見守る大谷さん。「イチゴは酸っぱいから苦手」と言っていた園児が、大谷さんの農園で「**イチゴ甘い！**」と言ってパクパク食べる姿に励まされ、「そろそろ『終活』しなあかん年齢やけど、まだまだ体力の続く限りは続けていきたいです」と笑顔で話されます。大谷さんの活動は、**竜王っ子の楽しくおいしい思い出**の一つとなり、子どもたちの健やかな成長を支えています。

おいしくて楽しい収穫体験が園児たちの思い出の1ページに

1 収穫にきた子どもたちを案内する大谷さん
2 「おイモはこうやって大きくなるんやで」と笑顔で園児に話されます

廣瀬 松男 さん

ひろせ・まつお　（川守）

どろんこ遊びや田植え、稲刈り体験の場として自らが所有する田んぼを竜王幼稚園の園児に提供。園児たちへの食育指導や体験の場の準備などに尽力。

「竜王のお米を誰よりも竜王の人たちに食べてもらいたい。小さなころから米作りに触れることで米離れを防ぎたい」という思いを持っておられた廣瀬さん。まちのフォーラムで竜王幼稚園の先生と子どもたちの米離れについて話されたことがきっかけで、平成18年から園児に米作り体験を提供されるようになりました。園児たちは、廣瀬さんから「お米が出来るまでのお話」を聞いて、もみまきから田植え、稲刈り、脱穀まで米作りの一連の工程を体感しながら学びます。「子どもたちには『**おいしくなぁれ！**と言いながら苗を植えるとおいしくなるんやで』と話しているんです」と語られる廣瀬さんの笑顔からは、園児への温かい愛情がうかがえます。収穫した米で作ったおにぎりを園児と味わいながら話をされるのも楽しみの一つだそうで、「子どもたちには、将来、竜王でお米を作り、自分たちが作ったお米を食べてもらいたい…地産地消が願いです」と話されます。廣瀬さんと作るおいしいお米効果で、これからもますます竜王町に「**お米ファン**」が増えていきそうです。

地産地消の願いを込めて、子どもたちにお米のおいしさを伝えたい

1「おいしくなぁれ！」と言いながらみんなで田植え
2 広瀬さんの手ほどきを受けながら稲を刈り取る園児
3 昔ながらの「千歯こき」で脱穀体験

人のため、地域のため、夫婦二人三脚でこつこつ、こつこつ

1 生き生きとした笑顔がすてきな正勝さん
2 道具を使い分け丹念に草と土を除去されます

大橋 正勝 さん・博子 さん

おおはし・まさかつ　ひろこ　（駕輿丁）

平成18年から毎年、春から夏にかけて雑草の生い茂る時期を中心に、夫婦で小・中学校の通学路である地元駕輿丁周辺の県道の歩道約500メートルの草刈りを実施。

ご夫婦ともに奉仕作業が好きだと語る大橋正勝さん・博子さん夫婦。正勝さんは、歩道に草が長く茂り、見通しの悪い中を通学する子どもたちの様子を見て、誰に言うことなく草刈りを始められました。車の往来が少ない土・日曜日や早朝などに、歩道の縁石周辺に生える草を手作業で除去。そんな正勝さんを見た博子さんは、正勝さんが刈り取った草を一輪車で収集されるようになり、長年にわたり**夫婦二人三脚**で作業を続けておられます。夏の暑い日など、多いときは一輪車３杯分もの量になる草を刈り取るのは大変な作業。しかし、「竜王町には川が多くあるので、皆さん堤防の草刈りに苦労されています。駕輿丁には堤防がないから、その分道路の草刈りで奉仕作業をしたいと思ったんです」と話されます。この思いから、正勝さんは竜王清流会による善光寺川の清掃にも積極的に参加。**人のために、地域のために、こつこつと**環境美化作業をされるご夫婦の姿は地域の誇りとなっています。

中江 初子 さん

なかえ・はつこ　（信濃）

５年以上にわたり地元信濃の公園に、サルビア、パンジーなど四季折々の花を植え、手入れを続けられているとともに、自ら育てた苗を自治会や弓削ふれあいプラザに提供。

「本当にお花が大好きで、自分が楽しみながらしてたことやのにこんな賞を頂けるなんて…」と終始謙虚に話される中江さん。子ども会活動の休止で花が植えられず寂しい状態だった公園を見て、ご自身で育てた花の苗を植えられたり、弓削ふれあいプラザで開催されている「子育てひろば」に苗を提供されたりと花のある地域づくりに取り組んでこられました。今では6月や11月に信濃地区の皆さんで中江さんが育てた苗を植えられているそうで、**花々のある風景**が集落の人たちや道を通る人の心を和ませています。夏の暑い時期の水やりや草引きは大変な作業。しかし、「地域の人から『ご苦労さん』、『きれいに咲いたなぁ』って声を掛けられると、次もがんばろうって励みになります。みんなに見守ってもらいながら続けてきました」と明るく話される中江さん。ほかにも集落センターで地域の皆さんがお茶を飲みながら語らう「らくらくサロン」を開催されるなど、**居心地のいい地域づくり**のために生き生きと活動されています。

花々のある風景が
地域みんなの心を和ませる

1 花が咲くのを楽しみに苗植えをする中江さん
2・3 公園には色とりどりの花が植えられます

1 歴史ある子どもたちの応援演技は区民の誇りです
2 毎年みんなで集まって食べる焼き芋は最高の味だとか

区民の絆を深める
ふるさとの思い出づくり

磯部 俊男 さん

いそべ・としお　（西出）

約40年間にわたり地元西出の子ども会活動を支援し、特に運動会での子ども会独自の応援活動をはじめ継続的な助言・見守りなどの支援により、子ども会活動の基盤をつくり上げられた。また、毎年自らの畑で作るサツマイモを子ども会活動に提供。

地域の人が「大変な努力と根気によるもの」と口をそろえる磯部さんの活動の原点は、祖母のまちさんの『今の自分があることは、地域のおかげ。地域へ恩返しをしなさい』という教えから。大学を卒業後、地元西出に帰ってきたときに、まず子どもたちによる運動会の応援演技をしたいと考えられました。当時の西出青年団の皆さんで子どもたちに振付けを教えて３年ほどが経つと、上級生は下級生を指導するようになり、子ども会をまとめ上げるまでに成長。「みんなが集まれる場所をつくってやりたいんです」と語る磯部さんは、「子どもたちの自主性こそが大切」と、子どもたちの活動には、**目を離さず手を出さず**、常にそばで見守ってこられました。また、20年前からはサツマイモを作り、焼き芋大会を実施するなどして子どもたちにふるさとの味を提供。「西出は何でも好きなことをさせてくれる風土なんです。そして西出婦人会の強力な後押しもあったから、この活動を続けてこられたかなぁ」とこれまでの長い道のりを振り返られる磯部さん。地域のためにできることを続けたいという磯部さんの活動は、区民の絆を深め、**ふるさとの思い出**として子どもたちの心に刻まれていきます。

ひまわり会 さん
（橋本）

平成20年ごろから橋本地区の有志のメンバーが集まり、未就学児と保護者を対象に、子育て情報交流と子どもたちの遊び場として「ひまわりひろば」を開催。現在は６人のメンバーを中心に絵本の読み聞かせや季節の遊びなど内容を工夫しながらひろばを実施。

パっと明るく笑顔が輝くイメージで名付けられた「ひまわり会」。「メンバーが孫を持つようになって、地域を振り返ってみると新しいお嫁さんや小さなお子さんを知らなかったんです」と、地域のつながりを生み出したいと考えられたことから活動を開始されました。幼稚園の先生をされていたメンバーを中心に遊びの内容を決めているそうで、毎月２回程度、橋本地区の集落センターや公園で粘土遊びや宝探しなど工夫を凝らした遊びを実施。活動をきっかけに、若いお母さんとも仲良くなったそうで、ひろばの活動が世代間の交流を育んでいます。「ひろばの後は、何か**ほんわかした温かい気持ち**になるんです。毎月何かできるということは、私たちの生きがいにもなっています」。ひろばに参加するお母さんから「今度はいつ？また行くわ！」と声を掛けられることが励みになり、「今度は何をしてあげようかなぁという気持ちでがんばれるんです」と語られます。みんなを笑顔にさせる「ひまわり会」の皆さんの活動に今後も期待が高まりそうです。

1 絵本の読み聞かせに真剣に聞き入る子どもたち
2 子どもたちも毎回ひろばを楽しみにしています

ひろばではみんなが
ひまわりのような笑顔を
咲かせます

1 春祭りで子どもたちを優しく見守る橋部さん
2 一人一人丁寧に指導する橋部さんに子どもたちも真剣に向き合います

自分を育ててくれた地域に
少しでも恩返ししたい

橋部 吉夫 さん
はしべ・よしお　（鏡）

自らの弓道経験を生かし、鏡神社の春祭りで弓神事を行う子どもたちへの指導を約30年にわたり続けられているほか、地域のまちおこしの奉仕活動などにも尽力。

すでに成人した子どもたちにも「弓の先生」と慕われる橋部さん。約30年前に地区の役員から依頼されたことがきっかけで、毎年春祭りの一週間前に子どもたちに弓神事の指導をされています。その長いキャリアから今では二代目の子どもを教えることもあるそう。練習では、嫌々練習をして失敗ばかりだった子も、本番ではその緊張感から必ず的を射止めるそうで、本番後には「おっちゃん、もう一回したい」と話すなど、子どもたちにとって弓神事がふるさとの思い出の一つとなっています。「私の教えは矢を的に当てることでなく、『**礼に始まり礼に終わる**』といった礼儀を伝えること」と地域での教育を大切にされており、「大きくなった子どもたちから『弓のおっちゃん』と声を掛けられるときが一番うれしいです」と、優しい笑顔で話される橋部さんからは、子どもたちへの深い愛情が感じられます。また、「鏡の里保存会」でも積極的に活動されるなど、「少しでも自分を育ててくれた**地域への恩返し**をしたい」と話される橋部さんの活動と人柄に地元の人たちからは「地域のかがみ」と信頼が寄せられています。